

新生児期における TSH 値の変動とスクリーニング 応用への検討

大阪市立小児保健センター	大浦敏明 鶴原常雄 長谷 豊 森 道子
大阪大学中央臨床検査部 大阪血清微生物研究所 聖バルナバ病院	宮井 潔 川島 実 前田紀夫 久原良躬 山村博三
大阪市環境保健協会	石飛由美子

A われわれは、生後第 5 日から第 7 日の間に採血した血液濾紙を用い、TSH の RI 測定法により新生児の甲状腺機能低下症をスクリーンしているが、その正しい実施のためには、本邦新生児の臍帯血から生後 1 週間の血中 TSH の変動を知る必要が生じた。

そこで聖バルナバ病院で出生した、成熟新生児 20 例につき、標準的血清 TSH 測定のほか、血清 10~50 μL を用いる微量測定、血液濾紙による測定 of 3 者を同一議料につき実施した。

その結果、臍帯血から生後満 5 日（生後 6 日）までの血清 TSH は、臍帯血 1.6 ± 5.9 , 0 日 2.1 ± 4.8 , 1 日 1.5 ± 5.3 , 2 日 9 ± 4.4 , 3 日 9 ± 4.8 , 4 日 6 ± 3.5 , 5 日 $8 \pm 6.6 \mu\text{u/ml}$ であった。同時に行なった血液濾紙による測定からの換算値は、満 2 日以前では血清値がやゝ高く、それ以後では逆にやゝ低値を示したが、スクリーニングの障害となるとは考えられなかった。

血中 TSH は生後満 2 日（生後第 3 日目）よりほど安定した値をとるので、生後第 5 日から第 7 日に採血することは、スクリーニングとしては妥当なものと考えられた。

新生児期における先天性甲状腺機能低下症のマス・スクリーニングに関しては、(1)より微量で再現性のよい方法と、(2)放射能汚染の問題のない方法——たとえばエンザイムイムノアッセイ——の開発が今後の課題であり、同時に TSH 測定法以外の、 T_4 測定法、リバース T_3 測定法など他の方法との比較が必要である。

原著文献 1 篇添付

B 先天性甲状腺機能低下症のマス・スクリーニング

大阪大学医学部、宮井潔氏と協同して行っているマス・スクリーニング成績は、宮井氏より報告する。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

A われわれは、生後第 5 日から第 7 日の間に採血した血液濾紙を用い、TSH の RI 測定法により新生児の甲状腺機能低下症をスクリーンしているが、その正しい実施のためには、本邦新生児の臍帯血から生後 1 週間の血中 TSH の変動を知る必要が生じた。

そこで聖バルナバ病院で出生した、成熟新生児 20 例につき、標準的血清 TSH 測定のほか、血清 10 ~ 50 μ l を用いる微量測定、血液濾紙による測定の 3 者を同一議料につき実施した。